

James McEvoy: *The Philosophy of Robert Grosseteste*

Clarendon Press, Oxford, 1982, xvii+560 p.

R. W. Southern: *Robert Grosseteste*

*The Growth of an English Mind in Medieval Europe*

Clarendon Press, Oxford, 1986, xii+337 p.

降 旗 芳 彦

リンカーンのビショップであり、オックスフォード大学の初代学長でもあり、最晩年においては教皇庁に対する痛切な批判者として知られ、またアリストテレス、ディオニシウス・アレオパギタ等の翻訳注解者として名声を博し、自然科学に対する深い造詣の持ち主でもあったロバート・グロステストは、中世の思想史を語るうえで無視し得ない巨人の一人であるが、体系的著作が欠けていることもあって、その幅広い思想活動の全体を統一的な視野の中に収めることはきわめて困難である。この中世イギリスを代表する巨人が我々に示す種々の相の間に必然的な関連を見、統一的なグロステスト像を示そうとするのが本書である。

著者は本論を *The Man and the Scholar*, *The Angelic Light*, *The Light of Nature*, *The Light of Intelligence* の四部より構成し、天使論、宇宙生成論、靈魂論、認識論等、グロステストの関心の対象となったあらゆる領域の問題を検討している。さらに Appendix においては、S. H. Thomson による著作目録以後に発見されたマニュスクリプト、出版されたエディション、翻訳についての詳細な言及が為されている。

第一部 *The Man and the Scholar* はグロステストの伝記であるが、ここでは、従来の研究に特に新しい成果が加えられているわけではなく、これまで明らかにされていないグロステストの前半生についても、立入った詮索が為されているわけではない。著者は従来の研究に基づいてこの略伝を構成しているわけだが、ここで著者は、人間グロステストを生き生きと再現することを主眼としている。したがって、グロステストの人間性を示すうえで欠かせない要素として、神学、哲学上の諸問題に対するグロ

ステストの見解の概容が紹介されており、第二部以後で論じられる事柄の結論の多くが、すでにこの伝記の中に集約されている。また、修道士たちとの親交、音楽の愛好、豊かな機知等を示すいくつかの日常生活におけるエピソードによって、人間味に満ちたグロッセストが語られる。著者はここで、ビショップとしての晩年のグロッセストの行動を、長年にわたる神学と哲学の探究によって形成された学者としての性格と、自己の神学的、哲学的立場の反映として説明している。学究生活のもたらした自己鍛錬や、理論と行動の一貫性を追求する傾向が、神学的、哲学的見解を規範としてビショップの任務を遂行することをグロッセストに要求し、妥協を許さぬ厳格な改革者としてのグロッセストの晩年の言動を生み出したとしている。

第二部 *The Angelic Light* では、天使論に関連する三つの著作、*De Intelligentiis*, *Hexaameron*, *Commentarius in Caelestem Hierarchiam* を年代順に取り上げ、このテーマについてのグロッセストの思索の展開を追っている。まず、*De Intelligentiis* における問題の提出の仕方、及びその解決法は、アウグスティヌスを始めとするラテン教父達の伝統を踏襲しているとされる。*Hexaameron* に論じられる聖書の創造に関する記述と天使の関係についても、グロッセストの見解は基本的にアウグスティヌスの立場に従っているとされている。

著者は1240年前後に行なわれた偽ディオニシウス文書の翻訳と注解にグロッセストの大きな転機を見て取っている。まず、グロッセストの注解者としての姿勢に独自のものがあることから、注解の具体的な方法について検討しており、原文の細部に至るまで正確にラテン語に写し取り、ディオニシウスの意図を極力忠実に再現しようとするグロッセストの方法の特質を、当時の一般的な注解の方法との対比によって明確にしている。注解の内容に関しては、グロッセストが、アウグスティヌスの伝統に立つ *beatific vision* とディオニシウスの位階論の間に矛盾はないと考え、天使論においても、上位の位階が順次下位の位階を導くことと、すべての位階が無媒介に神を見ることは両立し得ると考えていることを指摘している。しかも、グロッセストがディオニシウスの立場を一步押し進め展開する過程には、内容的にも、また用いられる概念のうえでも、アウグスティヌスの影響が顕著であるとしている。すなわちグロッセストは、ラテン教父たちのネオプラトニズムの伝統の基盤の上に、この伝統を損うことなく、むしろこの伝統を補足するものとして位階論を取り入れ、さらに、位階を教会を始め被造物

全般へと当てはめ、位階に応じて神と同化することを被造物の目標とし、上位の位階から受け取った光を下位の位階へと伝えることをその任務としており、この理論がグロッセテストの教会改革の理論的支柱ともなり、また宇宙発生論の根底をもなしていると著者は考える。

第三部 *The Light of Nature* では、グロッセテストの代表作とされる *De Luce* に見る宇宙発生論が取り上げられている。著者は、ネオプラトニズム的であるとされる光の形而上学とアリストテレスの宇宙論との比較により、その特徴を検討している。著者はまず、Bauer のテキストを訂正しながら *De Luce* の概容をたどり、*De Luce* における宇宙論の成立に影響を与えたと思われるものを列挙している。次に、アリストテレスの *De Caelo et Mundo* の中に、*De Luce* の具体的な素材を数多く見出だし得ることを明らかにしており、グロッセテストは *De Luce* を書いた段階では、*De Caelo et Mundo* に忠実であろうとし、創世記の宇宙生成論と *De Caelo et Mundo* における宇宙論を統合する試みとして *De Luce* を著したということを結論としている。しかし、いくつかの点でグロッセテストは意識的に、あるいは無意識のうちに、アリストテレスの宇宙論を逸脱しており、これらの点をグロッセテストの独創性を示す点として挙げている。まず、自然学における数学、とりわけ幾何学の重要性を強調している点であり、著者は、グロッセテストが、創造を数学者としての神によって、数学的原理に則って為されたと思倣しているとして、ここにグロッセテストの自然観の歴史的意義を見ている。また、アリストテレスにおける天上の第五元素と、月下の四元素の間の完全な隔絶に対し、グロッセテストは物質的世界の根本的連続性を考え、質料の究極的な単一性を示唆しており、アリストテレス的天地二元論に対し、天上と地上を問わず、光をあらゆる物質性の根源とする一元論に立つとして、これは近代の天文学の改革にとって先駆的な意味を持つと考える。このような点を総括して、著者は、ギリシア的、ことにアリストテレス的宇宙論と聖書の創造論との衝突が *De Luce* の独創性と先駆性を生み出しているとする。

第四部 *The Light of Intelligence* では、グロッセテストの霊魂論を中心に、認識論、人間論等における年代的発展を捉え、またその発展の契機となった要素を分析している。ここでも著者が、グロッセテストにとって最大の課題であったと考えるのは、ディオニシウスを中心とするギリシア教父達の主張とアウグスティヌスを始めとするラテン教父

達の伝統との調停である。特に、人間にとって、神の本質を直接に認識することが可能であるかという問題に、この二つの潮流を両立させるような仕方であることが、グロッセテストに要求された立場だったとする。

人間の認識の成立に関しては、ネオプラトニズムに由来する神の光による照明説と、感覚的知識を不可欠な基盤として真理の把握へ向かうアリストテレス的な認識論とが、双方とも是認されており、アリストテレス的認識論を、日常的な経験による認識に当てはめ、照明説を、beatific vision を頂点とする、可感的世界を越えた信仰の領域に当てはめることで、両者の調停が図られているとする。

人間論の点では、グロッセテストが人間をあらゆる被造物の中心と見做していることに著者は着目する。とりわけ、この認識を支えるものとして、人間が全宇宙を映すマイクロコスモスであり、可視的世界のみならず、霊的世界をも代表しているとする考えを取り上げ、ここにすべての被造物の統一として、また創造の最終目標として人間を捉えるグロッセテストのヒューマニズムを見て取っている。そして、この立場は、人間を天使の下位に置く考えや、肉体との結合を靈魂の墮落とするプラトニズム、さらには、天上と地上との断絶を説くアリストテレス的自然観を超えたものとして、独自の意義を持つものと著者は考える。また、人間をマイクロコスモスとする見地は、位階論の中にも取り入れられ、教会を始めとする人間の社会組織が、天使の位階を写すものであるとする立場が、グロッセテストの教会改革の理想と教皇庁批判の根拠になったとする。

著者は、この研究書において、グロッセテストに影響を与えたと思われるいくつかの思想潮流を分析し、これらの思想潮流とグロッセテストを比較対照することで、グロッセテストの独自性と歴史的意義を明確にしようとしている。結論的には、グロッセテストは、アウグスティヌス、アリストテレス、ディオニシウス・アレオパギタ、アヴィケノン等に代表される思想潮流の調停者であり、アウグスティヌスのネオプラトニズムの伝統に立脚しつつ、アリストテレスの方法と概念を取り入れ、さらに、使徒の時代へのあこがれから、ディオニシウスに傾倒し、これらを統合しようと努力する中で、自己の立場を築いたことになる。この結論には取り立てて目新しいものはないと思われるが、むしろ、グロッセテストの思想の構成要素を分析していく際の幅広くかつ緻密な研究に本書の真価があると思われる。著者は、各々のテーマについて、グロッセテストに影響を与えた可能性のある神学、哲学上の諸説を広く取り上げ、それらとグロッセテストと

の共通点及び相違点を、詳細に指摘している。これにより、当時の思想的時代背景が明確にされ、各々の著作と取り組むにあたってのグロステストの問題意識が再現されることになる。グロステストの問題意識が再現されるに及んで、宇宙論、天使論、認識論、人間論の相互関連をたどることが可能になり、グロステストの思索の全体像が浮かんで来る。著者は、グロステストの思想活動の枠組みを捉え、各種のテーマの必然的な関連を示し、生きた思想家、宗教家としてのグロステスト像を描くという困難な課題に十分な成果を収めている。今後本書は、グロステスト研究の基本文献の一つに数えられることにならうと思われる。

\* \* \*

McEvoy がグロステストの著作の内容についての緻密な研究により、グロステストの思想の構成要素を分析し、個々の要素がヨーロッパの種々の思想的伝統に根ざすことを突き止め、これらの思想的伝統の調停者としての穏健なグロステスト像を描いたのに対し、Southern は、むしろ、グロステストを取り巻く歴史的状況を研究し、グロステストを当時の歴史的背景の中に置くことにより、グロステストの独創性を浮き立たせ、その独創性の由来を、当時のイギリスの社会的、学問的環境の中に見出だそうとしており、ここに McEvoy のグロステスト像とは全く対照的な個性的思想家としてのグロステスト像が描かれることになる。

著者は、グロステストと同時代の Matthew Paris, Roger Bacon から Wycliff を経て今日に至るまでのグロステストに関する評価の変遷を展望し、Matthew Paris の年代記に見る、伝統の破壊者、国王や教皇に対する容赦のない批判者、聖職者たちに過酷な態度を示す暴君的ビショップ、あるいは、Roger Bacon の著作に描かれた、当時の学問の欠陥を見抜き、新たな学問の方法を予見する孤高の改革者、さらには、Wycliff の時代における、宗教改革の先駆者、迫害された聖者といった時代的主流に対する反抗者としてのグロステスト像が、今日、十三世紀前半の科学的、神学的発展にあらゆる面で貢献した、時代の中心人物としてのグロステスト像に置き換えられたことを指摘して、かつての eccentric なグロステスト像が忘れ去られてよいものであろうかという疑問を呈示する。

著者は、神が第一形相であるか否かを論じた書簡を例にとり、グロステストの方

法とスコラ学の方法との差異を論ずることで、この点についての検討を始める。権威の引用の仕方については、個々のテーマに関連する権威を体系的に収集し、それらを分類して、相互の対立を明確にするというスコラ学の手続きをグロステストは無視しており、結論を示すにあたっては、組織的な研究の結果としての客観的、最終的判断を示そうとするスコラ学に対して、グロステストは、最終的結論ではなく、個人的見解としての試論を提出することで満足し、最終的結論は後世の研究に委ねているとする。このような点から、著者は、グロステストを本質的にスコラ学の主流から孤立した思想家であると考え、スコラ学との相違を、晩年に神学と取り組んだため、新しいスコラ学の流れに取り残されたことによるとする McEvoy 等の見解を退ける。そして、この独創性の由来をさぐるため、著者はまず、当時のイギリスの学問的環境を取り上げる。当時、社会的成功を収めた人々や裕福な家族や保護者の支援を受け、パリ、ボローニャなどの大陸の大学で学んだ人々と、そのような支援を得られず、国内に留まり、経済的安定を得るまでに長い時間を費やす人々との二つの類型に分け、低い身分の貧しい家庭に生まれたグロステストは、後者に属すと考える。したがって、グロステストは、イギリス特有の教育環境が産んだ思想家であり、十二世紀後半、大陸の大学では、学問の領域と方法の固定化が進む一方で、イギリスにおいては、大陸の影響を受けつつも、なお、自己の興味を自由に追求める、縛られない学問生活が可能であったことが、グロステストの思想形成に大きな役割を果たしていると考えられる。

次に著者は、これまで明らかにされていないグロステストの前半生を、独自の資料批判を行ないつつ、歴史研究の方法を有効に利用して、巧みに再現してみせる。この過程で、グロステストが、パリの神学の直接的影響を受けておらず、イギリス国内では最も強いパリの影響下にあったオックスフォードで神学を講じ始めたのも晩年になってからであり、グロステストがその前半生において、大陸の影響から独立し、イギリス固有の学問の伝統に依存していたことが明らかにされる。

では、イギリスの学問的伝統とは何か、これを著者は、十二世紀イギリスにおける自然科学の状況の面から説明する。十二世紀には、先人の著作を素材とし、定義と概念整理とを手段とする大陸の大学の学風に飽き足らず、自然現象そのものと取り組むアラブ人の自然科学に惹かれて、アラブ世界との境界にまで出掛け、科学と哲学を研究し、アラビア語やギリシア語による自然科学の著作を携えて帰国した何人かのイギリス人たち

があり、彼らを通じて、新しい自然科学の動きが、イギリスに着実に浸透しつつあったとする。また、イギリスでは、当時の科学的知識を集めた植物誌、動物誌、鉱物誌が普及しており、自然の事物を、人間への警告と教訓を含み、創造主の心を映すものとして観察するこれらの書物が、グロステストの自然科学的知識の基礎になったとする。

このような環境の中で、グロステストがどのような精神的発展を遂げたか、とりわけ、科学的関心から神学的関心への移行がいかなる経過をたどったかが次に考察される。著者は、この考察にあたり、グロステストの自然学上の著作に関して、McEvoy によるクロノロジーを大幅に修正する。年代確定に困難を来たす *De Fluxu et Refluxu Maris* と *De Generatione Stellarum* を偽書と見做し、McEvoy が自然学的著作の半数以上を1225年以後に年代設定したのに対し、大半を1225年以前の作と考え、*De Luce* を1235年以後に移し、1225年以後、グロステストが神学と本格的に取り組む過程で、神学にとっての自然学の重要性が再び意識され、*De Luce* 等の著作が出現することになったと考える。

この新たなクロノロジーに基づき、著者は1225年以前のグロステストの自然科学的著作における方法論上の特色を指摘する。グロステストは自己の観察と先人の学説と同じ比重を置いており、アリストテレスの注解等においても、自然現象の観察に基づく新たな発見を付け加えることをもって、自然学への自己の貢献と考えている。したがって、感覚は科学的知識の源泉となり、感覚によって得られた自然現象の理解から、その物理的構造へ、さらにその構造を生み出す根本的要因へと進むことがグロステストの自然科学の方法であるとして、この方法は、過去の知識の収集と組織化というスコラ学の方法と対照的であるとしている。

1225年頃からグロステストはオックスフォードで神学を講じ始め、これを機に神学と本格的に取り組むことになるが、神学研究においても、グロステストは自然科学の方法をそのまま用いていると著者は考える。すなわち、自然科学において、自然現象の観察を科学的知識の基盤としたのと同様に、神学においては、聖書の研究をあらゆる神学研究の基盤と見做しており、また、方法の上ばかりではなく、被造物が象徴的意味を持つなら聖書のみならず被造物自体も研究しなくてはならないという観点から、内容的にも神学に自然科学を取り入れている。このため、グロステストの神学は必然的に創造に焦点を当てることになる。そして、現象の細部に普遍的法則を求める自然科学の研

究法は、神学において、創造された宇宙の細部にまで神の本性の象徴を見、神におけるすべての多様性の統一を求める傾向へと発展し、神の単一性を宇宙へともたらして、神と宇宙をつなぐものとしての光の概念に到達することになるとしている。

著者は、多様性の中に統一を求める試みを、グロッセテストの神学の根本的な特色と見做している。この試みは、多様な現象の隅々にまで、普遍的幾何法則が働いていることを見抜き、表面的多様性の奥に統一を求めようとする自然科学の探究のうちで培われて来たものであり、この試みが独自の神学説として結実したのが受肉に関する説であるとする。被造物の中心である人間と、創造者である神との統一としての受肉は、被造物に真の統一をもたらし、創造を完成させるものであり、人間の罪の結果として必要とされたものではなく、人間の罪とは無関係に、創造に不可欠なものとして、創造以前から計画されていたという受肉説こそ、統一を求める創造の神学者グロッセテストの特質を示すものであると考える。

晩年、グロッセテストがビショップとして、教会と聖職者の世俗的利欲による汚染を厳重に戒め、妥協を許さぬ厳格な言動を貫いたのも、統一を求める姿勢の現われであるとされる。一般的原則を行動の細部にまで当てはめ、ごく些細な行動に至るまで、行動と原則の統一を求めるのがグロッセテストの根本的態度であり、現実の問題の解決にあたって、繰り返し聖書に判断の基準を求め、魂の救済の原則に常に立返ることにより、徹底した厳格さが生じて来たと考えられる。また、1250年、教皇と枢機卿を前にして行なわれたリヨンでの教皇庁批判演説も、原則と行動の統一を求める立場の帰結であり、さらに、キリスト教世界の衰退と混乱を教皇庁の世俗的野心に帰したこの演説の結論は、十五年間のビショップとしての経験と観察に基づき、個々の現象の奥にひそむ普遍的原理を追求することで到達されたものであり、ここには、科学的な思考法が反映しているとする。

著者はグロッセテストを同時代の学問の流れから孤立した思想家として捉え、その独自性は、自己の才能はもちろんのこと、大陸におけるスコラ学の発展に遅れを取っていた当時のイギリスの地方的状況とイギリス特有の科学の伝統、及び、その前半生において、グロッセテストに大陸の学風と接する機会を与えなかった不遇な生立ちに由来すると考えている。すなわち、大陸の神学の助けを借りることなく、自然科学の伝統のみに支えられ、自力で道を開いて来たところにグロッセテストの独創性の要因があり、前半



生を費した自然科学の研究が、グロステストの思索と行動の骨格を成していたことになる。我々は、本書に描かれるグロステストが McEvoy の研究書におけるグロステスト像と全く対照的であることに驚かされるのであるが、最後に著者は、グロステストにとって学問的孤立は宿命的であり、グロステスト自身の内部に含まれる矛盾のために、これまでグロステストを理解したと信じて来た人々も、必ず何らかの本質的要素を見逃して来たし、自分の著書の内容についても、果たしてグロステストが賛同するかどうか疑わしいと書いている。McEvoy と Southern のように全く対照的なグロステスト理解が可能であるということ、このことはグロステストの本質的独自性とかかわっていると我々は考えるべきなのかもしれない。

---

Mark D. Jordan: *Ordering Wisdom. The Hierarchy of Philosophical Discourses in Aquinas.*

University of Notre Dame Press, 1986, pp. xvii+297

稲垣良典

「トマスの著作はいかに読むべきか？」一見、この問いには容易に、確信をもって答えることができそうに思われる。たしかに真・偽作が未詳であったり、著作年代について意見のわかれるもの（とくに近年『対異教徒大全』に関して P. Marc 説がひき起した論争を参照）もあり、まだ批判版が刊行されていない著作も多い。しかし、神学の総合的論述、討論集、聖書註解、アリストテレス註解、等、それぞれの著作様式を考慮しながら読むならば、文体は極めて単純明晰であり、そのすべてにトマスの「教える人」としての配慮が行きとどいている。その結果として、かれが言おうとすることを理解するのは通常それほど困難ではない。「プラトン対話篇はどう読まれるべきか？」という問いにくらべるとき、冒頭の問いはかなり容易に答えることができるのではない。

けっしてそうではない、というのがトマスにおける「哲学的説話の本質」<sup>グイヌース</sup>をあきらかにしようとする本書の主張である。著者によると、トマスの著作は読者にたいして